

感性を育む和学講座第20回

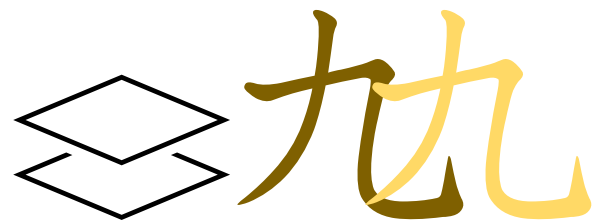
菊の節供
お月見
折り紙の歴史
と
やまと言葉国学

令和4年9月7日



菊と後の雛(のちのひな)

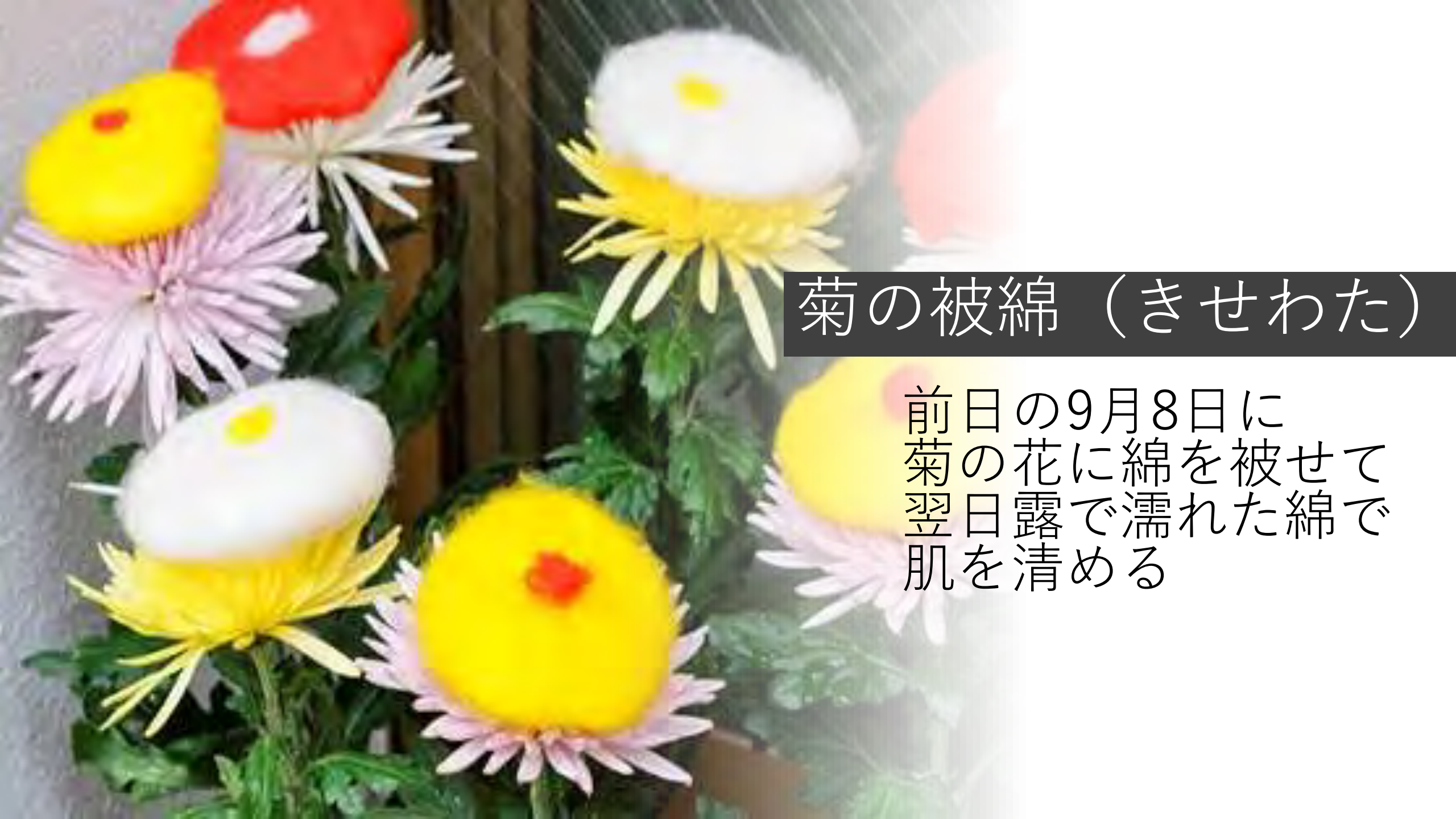
九月九日、陽の最も大きな数である「九」が重なるという意味から「重陽の節供」と云われています。旧暦の九月九日は、新暦の10月頃になります。



「重陽の節供」は別名「菊の節供」とも云われており、菊にまつわる行事がいくつか伝えられています。

お酒に菊の花びらを
浮かべて飲む菊酒





菊の被綿（きせわた）

前日の9月8日に
菊の花に綿を被せて
翌日露で濡れた綿で
肌を清める

乾燥させた菊の花卉を詰め物にして作った菊枕。

菊には薬効成分があり、体の余分な熱を冷ましてきました。

それゆえに、不老長寿の効果があると信じられていたのです。

その起源は、菊花の露が入っていた谷川の水を飲んだという菊水伝説にありま





157種もの植物が詠まれている「万葉集」ですが、菊の花は一首も読まれていないのです。飛鳥時代・奈良時代にはなかったからでしょう。

平安時代の「古今和歌集」には菊が盛んに読まれています。菊は奈良時代末か平安時代初めに中国から入ってきたと思われれます。ただ、もっと以前、仁徳天皇の時代には古代中国から入ってきたという説もありますが、そうだとしたら、万葉集に詠まれていないのは不思議です。

いずれにしても、多くの花卉を持ち、お香に似た匂いの菊は日本人を魅了します。



菊の栽培が日本で盛んになったのは、冬に芽をとり、春に植え、夏に成長、秋に鑑賞するというプロセスが、稲の栽培に似ているのが影響しているという説もあります。

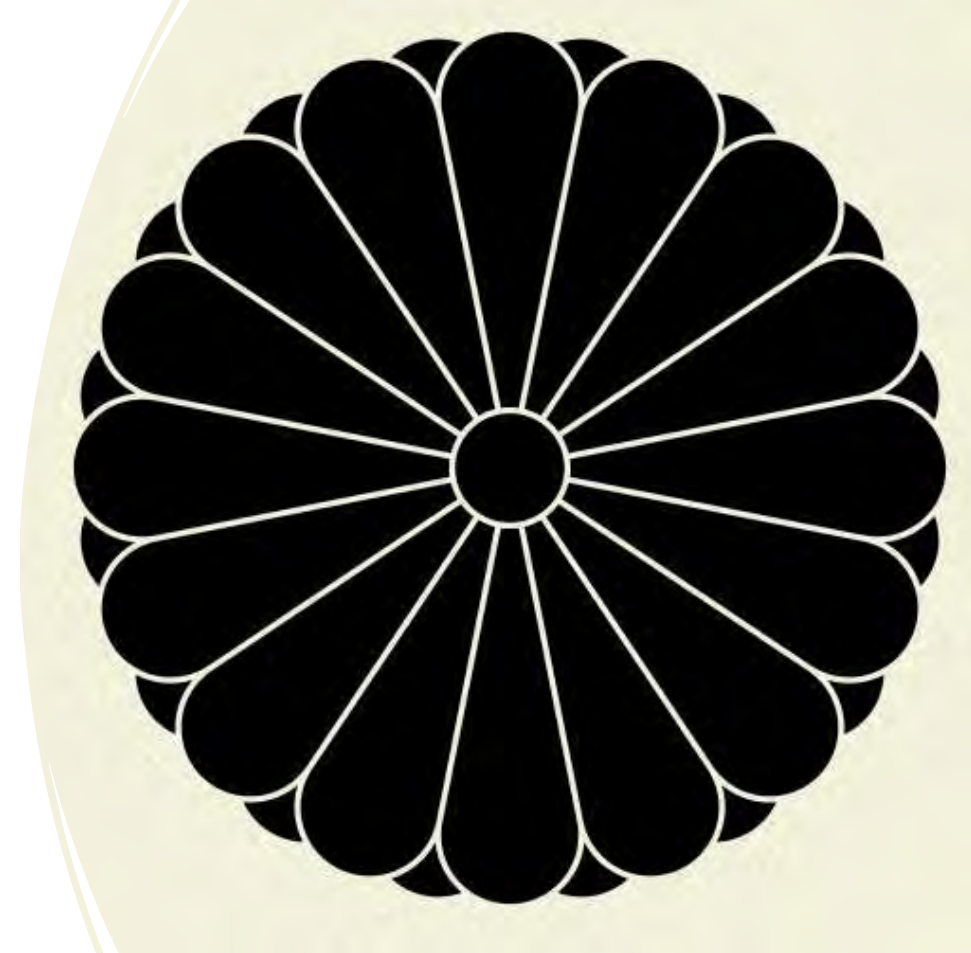
江戸時代には育種が展開し、品評会も行われています。

幕末には日本の菊が本家であった中国に逆輸入されるようになり、春の桜と同じように、日本の秋を代表する花になるのです。

菊の花を愛したのが、鎌倉時代の後鳥羽上皇です。衣服や調度品に菊の文様をつけたとされています。また、後醍醐天皇は後鳥羽上皇に倣い、牛車の紋を菊に変えました。以降菊の紋章は皇室の御紋章として定着していきます。

特に明治時代になると、太政官布告第802号により「十六葉八重菊」が公式に皇室の紋とされます。その後、皇族以外の菊花紋の使用が禁止されます。

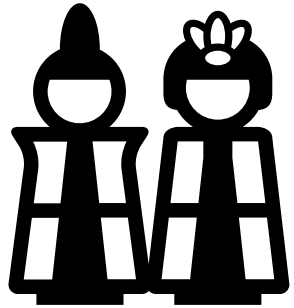
戦後、皇室儀制令は廃止され、菊花紋章を天皇・皇室の紋章と定め、また日本の国花章に準ずる紋章として使われています。



後の雛

このように、重陽の節供には「菊」にまつわる行事が多く行われます。

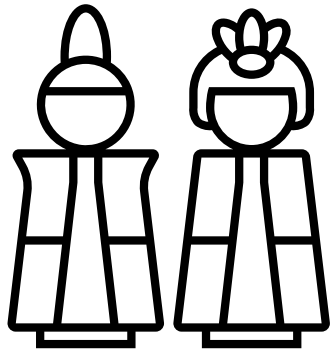
その一つに「菊雛」があります。菊雛は「後(のち)の雛」とも呼ばれ、重陽の節供に雛人形を飾るのです。三月三日の上巳の節供からちょうど半年。



片づけておいた雛人形を出して、菊の花とともに飾るのです。三月に飾った雛人形を一年間しまっておくのではなく、半年経った頃に出して人形の虫干しをすることで、痛みを防ごうとすることで人形が長持ちするという生活の知恵もあります。

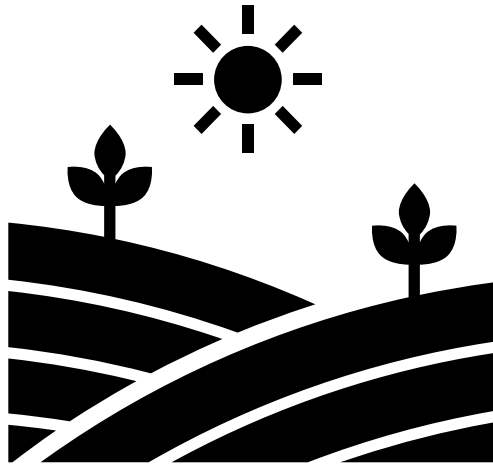
後の雛

本来、雛人形もそうですが、人形は人間の分身として災厄を代わりに引き受けてくれるという役目があります。その人形を大事にすることは長寿に繋がるという考え方もできます。



重陽の節供に「後の雛」として飾る雛人形は男雛、女雛だけの親王飾りと云われています。

三人官女などの家来やお道具は出さないそうです。上巳の節供の時より慎ましい飾り方となるようです。



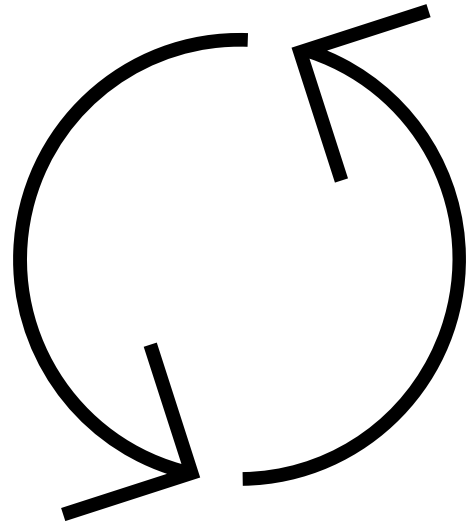
俳句の世界では「後の雛」「菊雛」は秋の季語
となっています。
有名な俳句をご紹介します。

「後の雛 うしろ姿ぞ 見られける」 泉 鏡花

「豊年の 雨御覧ぜよ 雛たち」 一茶

日本の年中行事は繰り返されることも多くあります。お正月の終わりの藪入りに対して、お盆の藪入りは「後の藪入り」。秋のお彼岸は「後の彼岸」。秋の衣替えは「後の衣替え」。

十五夜のあとの十三夜は「後の月見」、そして重陽には「後の雛」となります。



お月見 の いろは



中秋の名月

旧暦の8月15日のお月様を「中秋の名月」と称します。
巷では「仲秋の名月」と記している場合もあります。
どちらが正しいのでしょうか。

「**中秋**」とは、秋のちょうど真ん中の日、8月15日を指します。

「**仲秋**」とは、季節の真ん中の月を指します。

仲春なら2月、仲夏なら5月、そして仲秋は8月となります。

「中秋の名月」は8月15日の月。

「仲秋の名月」は8月の名月となります。

厳密に言うなら、「中秋の名月」が正しいとなります。

しかし、時代とともに、区別も厳密ではなくなり、

広辞苑（第4版）にも

「中秋」と「仲秋」は同じ意味となっています。

お月見 の いろは



今年の「中秋の名月」は、今年9月10日です。

旧暦では、朔日（1日）は新月で、15日は満月となりますが、必ずしも15日が満月とは限りません。

「満月」は地球から見て、月と太陽が反対方向になった瞬間の月を指します。

旧暦の朔日（1日）は朔（新月）になった瞬間を含んだ日としますので、0時00分に朔となる日もあれば、23時59分に朔となる日もあります。

また、朔（新月）から望（満月）までの平均日数は14.76日で、これが本当の満月の月齢の平均となります。そのうえ、月の軌道が楕円形のため朔から望までの日数は13.9～14.7の間で変化します。

ゆえに、満月が遅れることがあります。

月見団子

ところで、「中秋の名月」は何をする日なのでしょうか。

お月見、月を愛でる日です。

秋の七草

萩、桔梗、葛、藤袴、女郎花、尾花、撫子を生けて、お団子や収穫物をお供えします。



萩



尾花(ススキ)



葛



瞿麦 (なでしこ)



姫部志(おみなえ)

し)



藤袴



朝貌(桔梗)



9月になると和菓子屋さんには「月見団子」が姿を見せます。この月見団子も、関東と関西では違いがあります。関東では丸い白一色のお団子ですが、関西は楕円形で半分あんこに覆われているのです。



丸い月見団子は、満月を想像して大きく作ります。小さいお団子にすると「仏団子」と言って嫌われます。関西の楕円形の月見団子は芋をイメージしています。芋の収穫時期なので、中秋の名月を「芋名月」と別名があるのです。元々は里芋をお供えしていたという説もあります。



里芋を茹でて、三分の一皮を残して剥き、塩を少し振って食べる料理を「きぬかつぎ」といいます。これは平安時代の貴族の女性の衣装「衣被（きぬかづき）」になぞらえて名付けられたと云われています。

片見月

十三夜

実りの秋に月を愛でる。単に風流さを楽しむだけではなく、曆を刻み、日々の生活に様々な恩恵を与えてくれるお月様への感謝を表す日でもあるのでしよう。

中秋の名月は、古代中国から入ってきた風習ですが、旧暦の9月13日（今年は10月18日）にも「十三夜」として月を愛でるのは日本だけの慣習です。

そして、中秋の名月を愛でたら、十三夜の月（栗名月）も愛でて完結されます。

どちらか一方だけだと「片見月（かたみ月）」と言い、忌み嫌われるようです。

「十三夜」は満月になる前で、不完全な姿を好む日本人独特の美意識と結びついたと思われます。

折紙のいわれ

外国の人に喜ばれる日本の伝統文化の一つに「折り紙」があります。



色とりどりの正方形の紙が、折ったり開いたりすることで、花、鳥、など自然の動植物や車、船などに変化します。この「折り紙」の起源は「折形礼法」に遡ります。

進物を包んで渡すという文化は、平安時代から普及しており、公家は主に絹の布に包み、絹の紐で結ぶやり方が主でした。とはいえ、「枕草子」には御餅を紙に包んで贈り届けられたことが出てきますので、和紙も使用されていたのでしょう。

一方、武家では、主に強靱で白い和紙を使用しました。和紙で包み、やはり和紙を漉った紙漉り(こより)または水引で結ぶという独自の文化を考え出したのです。

折形(おりがた)礼法は600年以上の歴史があり、日本の礼法の一つです。
礼法は鎌倉時代に誕生し、室町時代の三代将軍足利義満が武家独自の礼法を明確に制定しています。

武家礼法の指南役である高家(由緒正しい家柄、名門・伊勢家、小笠原家、吉良家)の中で、伊勢家には主に殿中の礼法、小笠原家には主に弓馬礼法を任しており、大名・旗本などに限って口頭伝承、雛形(模範となる形)を使い秘伝伝承としました。

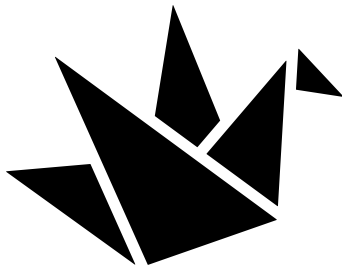
その武家礼法の一つに「折紙礼法(おりがみれいほう)または「折形(おりがた)」があります。**吉凶の原則、折り手順、渡し方から受け取り方、置き方**までが厳格に決まっていたのです。

現在私たちが知っている日本の折り紙は江戸時代に折紙礼法(おりがみれいほう)が遊戯として発展したもので、本来の礼法、作法、意味や目的を失っています。

殿中の礼法の指南役である伊勢家の伊勢貞丈(いせさだたけ)はそのことを憂い、「貞丈雑記(ていじょうざっき)」や「包結図説(ほうけつずせつ)」に、階級別、用途別に紙と折り方を使い分け、その意味や目的を記載し、唯一正統な文献として残しています。

昭和初期頃に、折紙(おりがみ)、折紙礼法(おりがみれいほう)、折形(おりがた、おりかた)と分けて呼ぶようになります。しかし、遊戯の折り紙と礼法である折紙が混同されるのを避けるため、また、「折る方法」と読まれ誤解されないように、礼法学者で美学者でもある山根章弘氏が折形(おりかた)を折形(おりがた)と呼ぶようにしました。

そして山根折形礼法教室として現代にも折形礼法を伝えています。



折形礼法は平和な江戸時代になると、和紙が安価で出回るようになったこともあり、寺子屋などで教えられるようになって、庶民に広く伝わります。



やがて、折形礼法から派生して、和紙を折ることで、様々な形を楽しむ

「遊戯折形」が生まれるのです。

今に伝わる「折紙」の原型です。明治時代に折形は礼法の一環として、義務教育に取り入れられました。

小学校や女学校の教科書には20~30種類の折形が掲載されています。大東亜戦争後は欧米化がより進んだことにより、学校教育から折形礼法は削除されました。



進物を表す「贈進」という言葉も「贈答」となり、百貨店が包装し、熨斗紙を貼り付け、先方に届けてくれるサービスが普及しました。

同時にお金を包む折形の祝儀袋も既製品が出てきます。現代では、コンビニエンスストアや百貨店などで手軽に買えます。しかし、間違っているものも多く見受けられます。

水引の数も本来は陽の数である、1, 3, 5, 7, 9本であるべきなのです。また、弔事は4本です。10本の水引は、最低の陰の数になり本当はあってはならないのです。

「贈進」はお人に物を贈ること、贈呈であり、お返しの意味はありません。「贈進」と違って「贈答」は人に物を贈ったり、お返しをしたりする意味になります。

贈られた方にすぐにお返しを贈ることは、しっぺ返しと捉えられます。義理や形式は礼の心とは違います。

贈るのは品物ではなく、贈り物の意味によって紙や水引を選び、気持ちを入れて折り包むという作業に、まことの心が込められるのでしょ。

感性を育む和学講座第20回

菊の節供
お月見
折り紙の歴史

と

やまと言葉国学

令和4年9月7日

